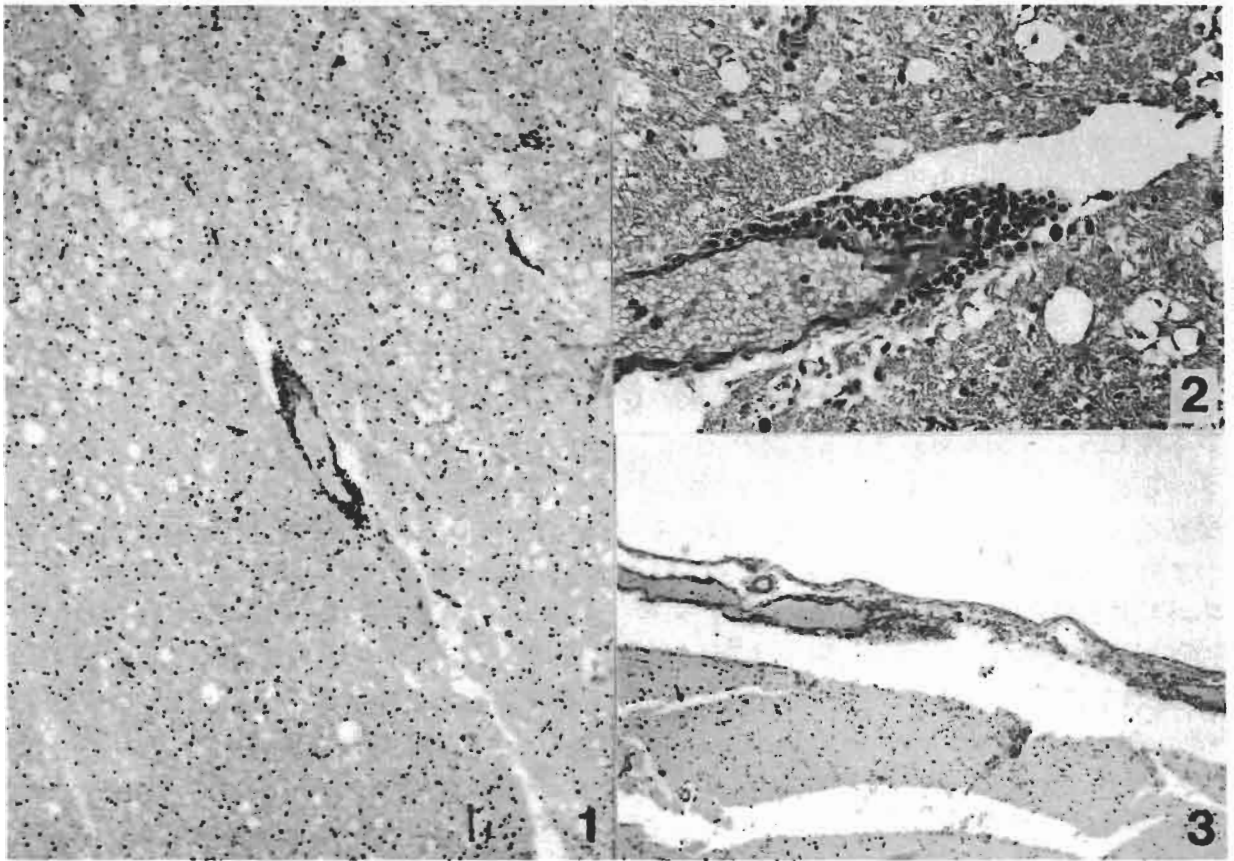


# アザラシの脳

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.520



**動物：**ゴマフアザラシ，雄，年齢不詳（幼獣），体重約70kg。

**臨床的事項：**大分マリンパレスが，1988年7月，3頭のアザラシを搬入したところ，翌年1月に1頭が嘔吐，食欲不振を呈し死亡し，解剖結果では肺炎ということであった。残りの2頭は同年7月24日に，宮崎フェニックス自然動物園に搬入された時には，ストレスのためかなり衰弱していた模様であった。この時の当症例の体温は38.8℃と高めで，8月24日には食欲不振，小刻みな痙攣を認め，翌日には眼球振盪を呈し死亡。もう1頭も同様の症状を呈し，3日後に死亡した。

**剖検所見：**肺，肝臓，腎臓，脳軟膜など全身のうっ血が著明で，肺リンパ節，腸間膜リンパ節の軽度の腫脹，十二指腸粘膜面終末部の点状出血を認めた以外に，他に著変は認めなかった。

**組織所見：**大脳，橋においてプラズマ細胞，リンパ球等の単核球が主体をなした著明な囲管性の細胞浸潤を認めた（写真1，2）。これらの細胞浸潤は，髄膜及び髄膜の血管周囲にもみられた（写真3）。神経細胞には，特に橋において核濃縮や，エオジンに好染するなどの変性

像がみられたが，これらは虚血性の変化と判断した。

一方，ジステンパー感染症との関連において，封入体については特に精査した。その結果，神経細胞やグリア細胞の核内に好酸性の物質を認めたが，核膜が断裂していたり，極く一部にしか認められなかったりするものがあり，これらはウイルス性の封入体とは言い難く，虚血性変化又は変性によるものと判断した。大脳中前部においては，以上のような所見が同様に又はやや軽度に認められたが，小脳では細胞の変性壊死はみられるものの，囲管性の細胞浸潤は認められなかった。

さらに，脳の切片で抗イヌジステンパー抗体を用いたPAP法を行ったが，その結果は陰性であった。また，電子顕微鏡による検索も行ったが，検索した範囲においては，ウイルス粒子やヌクレオカプシドなどは観察されなかった。

他の臓器では，腎臓において間質及び包膜下の出血，重度の肝臓の中心性うっ血，脾臓においては重度のヘモジデリン沈着とうっ血を認めた。肺は，うっ血以外著変は認めなかった。

**診断：**非化膿性髄膜脳炎。